雙蝶

透谷（そうちょう）の自殺

永畑道子

Michiko Nagahata

雙蝶

透谷（そうちょう）の自殺

永畑道子
Michiko Nagahata

藤原書店

著者紹介

永畑道子（ながはた・みちこ）

熊本市生まれ。旧制五高を経て，熊本大学東洋史学科卒。熊本日日新聞社会部記者，福音館書店編集部を経て，現在，作家，女子美術短期大学教授。ノンフィクション・女性史・教育問題の執筆に活躍。
主著に，『野の女――明治女性生活史』『炎の女――大正女性生活史』『青春流転』『恋の華・白蓮事件』『夢のかけ橋――晶子と武郎有情』『華の乱』『憂国の詩――鉄幹と晶子・その時代』『女感覚で生きる』（新評論）『ほんとうの学校を求めて』（講談社）『女が愛に向かいあうとき』（海竜社）『愛に還れ』（主婦の友社）『世紀末家族』（国土社）『花を投げた女たち――その五人の愛と生涯』『乱の女――昭和の女はどう生きたか』（文藝春秋）『おんな撩乱――恋と革命の歴史』（藤原書店）ほか多数。

雙　蝶――透谷の自殺

1994年5月16日　初版第1刷発行©

著　者　永畑道子
発行者　藤原良雄
発行所　㈱藤原書店
〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町
518番地 早稲田玉井ビル
電話 03 (5272) 0301
FAX 03 (5272) 0450
振替 00160-4-17013
印刷 白陽舎　製本 河上製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします　Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります　ISBN4-938661-93-4

【目次】

雙蝶

透谷の自殺

【第一場】……玄風……7
【第二場】……告白……23
【第三場】……青嵐……39
【第四場】……前夜……55
【第五場】……花野……77
【第六場】……若鷲……103
【第七場】……孤客……117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

【第八場】……星恋……133
【第九場】……蓮華……153
【第十場】……神・人……165
【第十一場】……飛蝶……183
【第十二場】……白刃……199
【第十三場】……宙天……225
奥書……237

裝幀……菊地信義

雙蝶

透谷の自殺

玄風

【第一場】

芝・飯倉通りを行く、
讃美歌の葬列。

明治二十七（一八九四）年五月十七日、まもなく昼にかかろうというとき、京橋から飛ばしてきた二台の人力車が芝公園台地にかかる坂下で、ふたりの客を降ろした。

ひとりは精悍な身のこなし、鼻が異様に大きく目はつりあがり、三十歳代前半、威風あたりをはらう気配がある。いまひとりは、ずんぐりと、やや前かがみの猪首、濃い眉、鼻のわきからふさふさと髭をたらし、ただものではない迫力が全身に漂っている二十歳代なかば。いずれも黒紋付、袴で、なだらかな坂の下に立った。

日がさんさんとふりそそぎ、早くも日陰が恋しくなるほどの陽光である。

後ろから何台も、俥がその坂を上っていく。揺られているのはほとんど女たち。帽子の陰からあきらかに外国人であることがみてとれるのは、女性宣教師たちか。喪服とはいえ贅をこらした着物姿の貴婦人、俥のあいだを縫ってミッション・スクールの制服を着た女学生たちが三々五々。

男ふたりはその道を避けて、飯倉の通りのほうへ回った。そこから切り立ったように険しい一本の坂が、やはり台地の上へ通じている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「この坂のほうが、北村門太郎君にふさわしい。そう思いませんか。猪一郎さん」
ずんぐりの口髭のほうが声をかけた。巨漢は大きくうなずき、黙って坂を上り始めた。
左手に古刹がある。猪一郎は狭い御堂の前につかつかと進み、懐からいくらかの銭を取り出して、敷台の奥に置いた。手を合わせ、
「山路君、君も拝め。キリスト教はときには仏教にも神道にもなる。いずれにしても役立てばよか」
山路と呼ばれた男は、うなずいて手を合わせた。
切り通しの崖から上へ、ふたりは足早に登った。

この当時の芝公園地二十号四番。いまは東京タワーが赤い支柱をのばしてそびえ立っている。きらびやかな人工の明りが、夜になればタワーを含む公園を浮かびあがらせる。巨大なボウリング場がこの所番地に建ち、カー・ラジオとともに音楽をかき鳴らしてやってくる若者たちの車が、その前を埋め、観光客が絶えまもない一帯である。
当時はおそらく間近かに海の気配がひろがっていたかもしれぬこの辺り、いまは潮の香りすら流れてこない。
猪一郎は、坂を登りつめたところで天を仰いだ。

「……彼が死んだのは十六日か」
「はい、昨日払暁だときいています」
「ということは、この横の紅葉館に十五日の夜、僕は来ていた。海軍将校たちのひそかな壮行会だよ。夜遅くまで賑って、俥でこのあたりを過ぎた。門太郎君の住居と知っていたら、立寄るすべもあったかもしれぬ」
「まさか、あなたがそういうことをされるとは、思いませんね」
山路弥吉は冷ややかにいった。一瞬、猪一郎は心許した相手であったはずの弥吉の顔をじっとみつめ、
「そうか。俺は北村君に、弟の影を重ねているのかもしれんな。あいつは天才肌で、俺のように努力をしない。本を読まずして、ひとこと言う。それが俺には……。まあこれは、いま言うべきことではないだろうが……」
弥吉はしずかにきいて、「さあ、行きましょう」とうながす。
二十号四番地の家は、もう庭地の外まで人があふれていた。鬱愴と茂る樹林がおおいかぶさるような下に、平屋の家があり、門の前には女学生たちが、かすかなハミングで讃美歌の練習をしていた。脂粉の香がただよってくる女たちのあいだを抜けて、ふたりは庭のなかに入った。
何人かの新聞記者たちがとり巻くのを振り切るように、縁側へ近づく。その姿をみつけて、奥

から小走りに出てきた女性が、頭をさげた。
「美那でございます。この度は突然のお手紙をさしあげまして。わざわざお越しくださるとは。まだ幸い横たわっておりますゆえ、もし会ってくだされば……」
さむらいのように折目正しいあいさつであった。猪一郎は襟を正されるような思いで、深々と頭を垂れ、
「ごぶさた致しました、徳富です。ぜひお参りをさせていただきたい」
弥吉は美那のもとにすすみ、じっと視線をあわせた。
「覚悟の日々とは思いました。見舞をすることもなくうち過ぎたこと、お許しください」
奥から女の子がひとり、走りでてきた。弥吉に抱かれる。
「そうか、よしよし、大きくなった。おまえさんが生まれてまもないころ、俺はだいぶ抱いてやったぞ」
いいながら、山路は眼を赤くした。ちょうど二カ月前、自分にも女の子が生まれたばかりであった。このみどり児を残して、門太郎は死んだ。
徳富猪一郎はさっさと八畳の間に上がりこんでいた。
本棚を枕に、長身を横たえている北村門太郎、薄化粧をほどこし、だが首のあたりは手拭いで

おおわれ、憔悴の果ての顔かたち。山路は二歳の英を膝に抱き上げ、その温かさに故人をしのんだ。

猪一郎はまもなく庭に出て、集まっていた内田魯庵、島崎藤村らと話している。

（門太郎君よ、なぜ自ら命を絶った。なぜ俺を呼ばなかった）

弥吉は心の奥で、男泣きに泣いた。ふと目をあげると、遺体の向こうに、前垂をはずしながら四十年配の女性が端然と坐り、弥吉をみて軽く目礼した。門太郎の母ユキであった。弥吉はじっと頭を下げ、そのまま外へ出た。

門太郎と美那がひどく心を遺ったユキのことは、重々知っていた。だが息子を亡くして、どこに悲しまぬ親がいよう。

美那のそばにいくと、親族の前で門太郎最期のようすが語られていた。

「あの人は、きのう家に居りませんでした。私は野津田の実家に行っていて、ここへ、夜のうちに帰ってきたのですが。どこへ行ってしまったやら、不安で、夜あけに近く、坂のあたりにでてみようかとこの子の手をひいて出かけたところで、ふと虫が知らせて、家の後ろをたしかめてみる気になりました。怖くてとても。気をとり直して、裏手の林に、あの人をみつけました。そのまま交番へ走り、男の人の力でやっと地上へ下ろしていただいて。……このようなかたちで別れてしまうとは……」

美那が十五日夜遅く、実家から帰ったときは、近くの料亭紅葉館の明りもすでに消えていた。子づれでさまようことは止めた。暗い夜道である。

実家へ久しぶりに帰った疲れがどっと出て、親子ともこんこんと眠りにつき、そのまま明け方となった。

そこだけ夜がまだ漂っているかのような家の裏手の、杉や松の木の繁みの陰に、みなれた門太郎の着物の柄を見つけた。宙に浮き、どこから登ったのか。美那の手には届かない脱力の後ろ姿である。

足の白さから、もはや命は身を離れている。全身がかすかに、渡る風のなかで揺れている。

美那は英を背中に負い、飯倉の交番へ走った。

警察電話で実家へ、石坂の家へ至急の電報を打ってもらい、警官ふたりがただちに現場にかけつけた。

やや遅れて、近くの医者による検視が始まった。

門太郎の痩せた身体から、夜露に濡れた着物をぬがせ、湯を沸かし、遺体を拭きあげる。美那はひそかに覚悟しており、涙が出るひまもなかった。

手伝いの男たちが、野津田の実家から急ぎ、やってくるだろう。ともかく人力を呼び、京橋弥

左衛門町に住む門太郎の母に知らせに走った。

現在の有楽町駅から晴海通りを銀座四丁目めざして進むと、左に並木通りと交叉する角がある。現在富士ビル。そこが北村透谷の少年期（満十二歳）以降の家、母が営む煙草店があった跡である。当時は赤レンガの町並で道路はまだ舗装されていない泥道だが、ガス燈がともり、イギリス風の出窓をそろえた瀟洒（しょうしゃ）な通りであったという。

美那は、門太郎の母ユキと膝づめで、葬儀について相談した。ユキは、仏式で、美那はキリスト教の葬儀を主張する。

「お母さま、あの人はキリスト教の洗礼を受け、これまで多くの仕事をしてきました。友人の方たちも、同じ教えによって結ばれた方がほとんどです。これは遺志です。どうかおくみ取りください」

美那はきっぱりと面をあげていった。門太郎の死によって、その母と、これがおそらく最後の対決かと思われた。

ユキは遺志という言葉にとらわれ、沈思して、やがて折れた。

待たせていた人力車に乗り、ふたたび芝公園の家に帰った。そこで美那は、大事な人びとへの通知をしたためた。手渡すために、どうしても人を走らせなければならない。葬儀は翌十七日の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com